

## 緒 言

国際経営研究所がキャンパスおよび経営学部の創設と共に付置され、今年度20周年を迎えた。その輝かしい歴史の1ページを本誌が飾ることになった。

20年前、紅白の幕に囲まれた体育館内で神主さんの祝詞を学部運営に携わる予定の教職員一同と一緒に、「かしこくも」神妙に聞き入ったことを想いだす。そのとき頭では別のことを考えていた。“コクサイケイエイ”を教育、研究する場としてふさわしいところなのだろうか、と。

しかしそれは杞憂に終わった。熱気にあふれたスタッフ一同の顔や立ち居振る舞いは、あたかも新天地に足を踏み入れた開拓民のそれに近かった。若者が集い、語らい、学び、コクサイ意識を共有するのに、建物や設備などの基盤整備は最重要の条件ではないことを肌で実感した。経営学の世界でも、モノやカネはヒトのやる気や動機を高めるのに、それほど重要な要素ではないことを教えてくれていることは周知のとおりである。

考えてみれば、ないから工夫するのであり、不足しているから代替の方法を必死で考えるのではないだろうか。大量生産、大量購入、過剰消費、大量廃棄という悪循環を繰り返している先進諸国の生活経済実態は、モノ余り現象を地で行っているようである。“モノ溢れればココロ貧しく”が現状だとすれば、“モノ満ち足りてなおココロ豊かに”するための工夫をしてみてもどうであろうか。

それを実現するための1つの方法が、物質的に豊かな時代の遺伝子を脇におき、学ぶことに貪欲になることであろう。ある意味で、頭脳に飢餓状態を植えつけることである。これは謙虚に学ぶことにも通ずるように思う。

昨年度新たにスタートした『マネジメントジャーナル』の本誌第二弾では、モノ溢れと同時にモノ不足や資源枯渇が引き起こすであろう、あるいはすでに引き起こしているであろう種々の経営課題について、地球的規模で熟考する機会提供を意識した。20周年記念特集を原点に戻って、研究所の名称にもなっている“国際経営”にした背景の一部である。

原稿はすべて依頼原稿の形をとった。学外4名の研究者、学内2名の研究者に執筆ご協力いただいた。6名とも内外関連学会でご活躍の第一線研究者である。本企画の趣旨をご理解いただき無理なお願いを快くお引き受けいただいた。この場をお借りして厚くお礼申しあげる。本誌が国際経営の本質を多角的、多面的、多次元的に議論する礎になることを願って。

神奈川大学国際経営研究所 所長

海老澤 栄一